

ねん がつ よつ か
2022年9月4日

ねんかんたい しゅじつ
年間第23主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

ルカ福音は、イエスの弟子となる条件として、「自分の十字架を背負ってついてくる者」であれと記します。同時に、「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎む」ことを不可欠であるとも記します。一体これは何を意味しているのでしょうか。

一つのヒントは、パウロのフィレモンへの手紙に記されています。この短い書簡で、パウロはコロサイの裕福な信徒であるフィレモンに、彼の元から逃げてきて、その後洗礼を受けた奴隷であったオネシモを、一人のキリスト者としての兄弟として送り返すことを記しています。当時の常識の枠組みの中で、自分の奴隷であった人物を兄弟として受け入れるフィレモンの行動は、他の人たちにとってこの世の常識をはるかに超える大きな意味を持つ愛のあかしの行動となったことでしょう。

パウロは第一コリントの1章17節で十字架の意味を、神ご自身によるすべてを賭した愛のあかしの目に見える行いそのものであると記します。この世の知恵に頼って愛をあかしするのではなく、全身全霊を賭して神の愛をあかしたイエス。それこそが十字架の持つ意味であることをパウロは強調します。

したがって、このルカ福音における十字架も、単に苦行をしろとっているものではありません。この世で生きていくために大切だと思っていること、すなわち人間の知恵が作り上げた常識に捕らわれるのではなく、そこから離れ、自らの全身全霊を賭して、神の愛をあかしするための行動にできるようにと、イエスは弟子に求めておられます。

その一つの道として、神がわたしたち人類に管理を任されているすべての被造物を守る行動が、過去の強欲な搾取に別れを告げて、神の愛に生きる具体的なあかしになるとして、教皇様は9月1日を被造物を大切に作る世界祈願日と定められました。日本の教会では、9月の最初の主日に祝います。教皇フランシスコは、回勅「ラウダート・シ」を発表

され、^{きょうかい}教会が^{かだい しんし とく}エコロジーの課題に^{たいせつ}真摯に取り組むことの大切さを^{きょうちよう}強調されました。

^{きょうこうさま きょうちよう}教皇様が^{はいりょ}強調されるエコロジーへの配慮とは、^{たん きこうへんどう たいしよ}単に気候変動に対処しようとか^{おんだん か}温暖化を^{く と}食い止めようとか^{たんどく かだい}いう単独の課題にとどまっては^{ふくだい}いません。「^{しめ}ラウダート・シ」の副題として^{かだい}示されているように、課題は「^{く いえ たいせつ}ともに暮らす家を大切に」^{きゅうきよくてき}することであり、究極的には、「^{せかい}この世界で^{なん}わたしたちは^い何のために^い生きるのか、^いわたしたちは^いなぜここに^いいるのか、^{はたら}わたしたちの働きと^{とく}あらゆる^{もくひよう}取り組みの目標はいかなるものか、^{ちきゅう}わたしたちは地球から^{なに のぞ}何を望まれているのか、^{と のぞ}といった^{しんし む あ}問い」(160)に^{しんし む あ}真摯に向き合い、^{しゃかいぜんたい すす みち}社会全体の^{すす}進む道^{みち}を見つめ^み直す^{なほ}回心が^{かいしん}求め^{もと}られています。

^{きょうかい}教会は、^{しゆくじつ}アシジのフランシスコの祝日である^{がつよつ か}10月4日^{ひぞうぶつ きせつ}までを「被造物の季節」として^{にほん きょうかい}おり、日本の教会もこの^{きかん}期間に^{さまさま}様々な^{けいはつかつどう おこな}啓発活動^{きょうこうさま さだ}を行います。教皇様が^{ことし}定めた今年の^{しへん}テーマは、詩篇19編から^{へん}取られた「^{ひぞうぶつ こえ}被造物の声に^{みみ}耳を^{かたむ}傾ける」と^{はつびよう}され、メッセージが発表^{はつびよう}されています。

その中で^{なか}教皇様は、「^{きょうこうさま}被造物が^{ひぞうぶつ}上げる^あ苦い^{にが}叫びは、^{さげ}母なる^{はは}大地の^{だい}叫びであり、^ち生態系から^{せい}消えゆく^{たいけい}多くの^{せい}生物の^{せい}叫び、^{せい}また、^{せい}気候危機の^{せい}影響を^{せい}最も^{せい}強く^{せい}受けている^{せい}貧しい^{せい}人々^{せい}の^{せい}叫び、^{せい}先祖からの^{せい}土地を^{せい}経済的^{せい}利益のために^{せい}搾取^{せい}される^{せい}先住民^{せい}たちの^{せい}叫び、^{せい}そして^{せい}地球^{せい}のエコシステム^{せい}の^{せい}崩壊^{せい}を^{せい}食い止める^{せい}ために^{せい}可能な^{せい}限りの^{せい}努力^{せい}を^{せい}望む^{せい}若者^{せい}たちの^{せい}叫び^{せい}でもある」と^{せい}記し、^{せい}そのためには^{せい}個人的な^{せい}回心^{せい}にと^{せい}どまらず、^{せい}共同体の^{せい}回心^{せい}が必要^{せい}だと^{せい}指摘^{せい}されています。

^{かみ}神の^{あい}愛をあかし^{せい}するために、^{せい}いまど^{せい}のような^{せい}十字架^{せい}を^{せい}背負^{せい}って^{せい}歩^{せい}もう^{せい}として^{せい}いる^{せい}ので^{せい}しよ^{せい}うか。